

講 義 等 の 内 容 (博 士 後 期 課 程)

授 業 科 目 名	講 義 等 の 内 容
経営学特別研究 (片山准一)	経営学における主要なテーマ (コーポレート・ガバナンス、企業の社会的責任、ビジネス倫理等) について考察する。
日本経営史特別研究 (加来祥男)	第2次世界大戦後の日本企業の発展とその仕組みにみられる特徴を、生産システム、雇用システム、株式会社制度を中心に、国際比較を念頭におきながら考察する。
企業経済分析特別研究 (片山准一)	戦後日本に於ける株式会社の所有と支配構造の変遷過程を商法 (会社法) と関連付けながら歴史的・論理的に分析を行う。
国際経営特別研究 (小川雄平)	グローバル化が進展した世界経済の現状の分析・把握と、それに伴う変容著しい国際経営環境に日々直面・対応している個別企業の国際経営戦略を理論的・実証的に考察する。
会計情報学特別研究 (山下壽文)	国際会計基準とわが国の会計基準の比較検討を行う。まず、概念フレームワークの構造とそのアプローチ (費用収益アプローチ・資産負債アプローチ) の検討、次に国際会計基準とわが国会計基準の相違点の検証、さらに国際会計基準によるわが国の制度会計への影響を分析する。また、わが国の制度会計における企業会計 (会計基準など) と法人税法の公正処理基準との関係について考察する。
会計監査論特別研究 (伊藤龍峰)	我が国の会計監査論の先行研究を整理しながら、企業の財務諸表に対する公認会計士・監査法人による監査制度を中心に、その問題点を検討・解明します。絶えず、財務諸表監査制度の本質とは何かという問題意識を持ちながら研究を進めてください。
税務会計特別研究 (春日克則)	近年、営利法人と非営利法人の活動領域の重なりが拡大するなか、両者を分離して規定するこれまでの会計基準のあり方が問われている。さらに、法人税法の分野においても、非営利法人の収益事業課税について34種を限定列挙する現行方式が限界を迎えている。そこで、本講義では、営利法人と非営利法人を統合する会計基準 (所得の計算原理) を考察するものであり、このために必要な専門的知識の習得を目標としている。 具体的には、非営利法人における利益計算構造について、財務会計 (報告) と税務会計の視点から考察する。具体的には、FASB、ロバート N. アンソニー及びJICPAが提唱する非営利法人に関する概念フレームワークを比較検討することにより、非営利法人の利益測定の意義及び測定方法並びに純資産 (資本) 概念について研究していく。この考察を踏まえ、非営利法人の課税所得概念及び計算構造についても研究を進める。
税法学特別研究 (宮崎裕士)	本講義は、租税実体法を中心に前期課程での学習内容を振り返りながら、税法学における古くて新しい問題とは何かに気づかせる基礎となるものである。我々は日常の生活や仕事の上で税というものと関わり合いを持たざるを得ないが、それらの日常や社会慣習に潜む税法の課税根拠について、判例を交えて洞察を深めていくことで、自身の論文の理論的基礎を見出していく。

授 業 科 目 名	講 義 等 の 内 容
民法特別研究 (丹羽崇之)	英米契約法・財産法・不法行為法の古典的判例を講読し、その歴史的意義、実体法理の形成、さらにわが国の判例法理、学説の発展に与える影響を考察する。
情報科学特別研究 (車柄玳)	大量の情報がネットワーク上に存在し、今後も爆発的に増大する。広大な情報の海から、求める情報を捜し出すために、膨大な情報を収集・分析し、再構築する必要がある。ネットワークの広域性、データの多様性・分散性・不均一性を考慮した広域情報検索システムについて研究する。また、ネットワーク接続された計算資源を用いて大規模分散計算を行う Grid コンピューティングの研究も行う。国内外の研究組織とも協力しつつ、計算問題分割、計算資源の分散管理、自動スケジューリング等を研究する。
情報メディア特別研究 (麻生隆史)	デジタル画像処理に関する様々な研究をまとめ、演習・シミュレーションで得られた成果を基に、論文作成のための研究のまとめ方、研究の細部に関する検証、情報科学の分野での直近の研究成果の調査をする。
情報セキュリティ特別研究 (車柄玳)	組織における情報セキュリティマネジメントシステム (ISMS) の設計・導入・運用・見直しについて事例を中心に考察する。
情報・信号処理特別研究 (麻生隆史)	多くの実験データには様々なノイズが乗る為、フィルタを通すなどそれぞれ適切な処理を実施することでノイズを除去し、その後何らかの知見を得る為のデータ処理を行っている。各自の研究テーマの関連研究においてどのような情報処理もしくは信号処理を利用しているかについて議論し、情報処理および信号処理についての理解を深める。
数値解析特別研究 (荒平高章)	自然科学系では偏微分方程式等で記述された数理モデルが多く存在し、その数値解析手法もかなり確立されている。近年では、社会科学系についても同様なモデル化が盛んに行われている。数値解析特別研究では、このような数理モデルについて色々な基準による分類を試み、それらの特徴や一般的な解法、解析条件などについて調査研究する。また、楕円型 Laplace 方程式について、数値解析手法の 1 つである有限要素法の代表的な離散化手法を修得し、具体的な境界値問題について解析システムを利用したシミュレーションを試みる。
応用数値解析特別研究 (車柄玳)	数値解析特別研究を踏まえて、自然科学系では数多く利用されている微分方程式の解の振る舞いの求め方について調査研究する。解の周期性や安定性、カオスなどについて検討し、それぞれ実世界でどのような事例の数理モデルとなるかなどについても深く考察する。
人工知能特別研究 (荒平高章)	1950 年代頃から本格的に発展してきた人工知能技術は、今日も様々な分野で応用されている。本研究は、どのような人工知能技術があるかについて、様々な分野の研究事例を通して議論し、考察をすすめる。
演習 I (麻生隆史)	情報科学の分野でも近年特に注目を浴びている、デジタル画像処理技術を詳細に解説する。特にフィルタリング処理や領域分割等を学び、それをデジタル画像処理へ応用しシミュレーションする。その際必要である様々なプログラミング技術 (MATLAB 等を含む) もあわせて学ぶ。さらに論文作成に必要な様々なアイデアを討論し、研究の進め方を指導する。

授業科目名	講義等の内容
<p>演習Ⅰ (荒平高章)</p>	<p>工学的手法や情報学的手法は、様々な分野で使用され、新たな技術が次々と創出している。そこで、これらの手法を用いて生体医工学・生体情報学に関連する諸問題にアプローチする研究を実施する。具体的には、組織工学に基づく材料設計、in vitro 実験、生体工学に基づく数値解析などである。</p>
<p>演習Ⅰ (小川雄平)</p>	<p>各自の研究テーマの具体化・明確化を図り、修士論文を再検討してリライトし、学会誌・学術誌への掲載に堪える論文に仕上げることを目標とする。そのための文献・資料の収集・解析等研究の進め方を指導する。</p>
<p>演習Ⅰ (春日克則)</p>	<p>近年、会計基準のコンバージェンスにより、税務会計と財務会計（報告）との差異が鮮明となっている。そのため、法人税法 22 条 4 項の公正処理基準について、研究者からは確定決算主義を廃止すべき旨の主張がなされ、判例においても公正会計基準と税会計処理基準（ビックカメラ事件）との分離が示されている。このような状況下において、税務会計と財務会計とのあるべき関係性（協調、補完、あるいは独立）について議論を深めていきたい。そのために、演習Ⅰでは、税務会計と財務会計（報告）のそれぞれについての先行研究について考察する。</p>
<p>演習Ⅰ (片山准一)</p>	<p>修士論文の再検討及び、特別研究において指導した内容から、各自のテーマを選別し、それに沿って研究指導を行う。</p>
<p>演習Ⅰ (車炳玓)</p>	<p>インターネット技術や計算能力の進化に伴い、高機能、高性能の知的情報処理に関する研究にますます関心が高まっている。演習Ⅰでは、人間の視聴覚情報処理に関する最新の研究動向について視野を広げるために、画像、映像、音声などを中心とするメディア情報の知的処理に関する基礎理論や先端技術等について知識を広め、研究に必要な基礎知識を習得する。</p>
<p>演習Ⅰ (宮崎裕士)</p>	<p>演習Ⅰでは、自分の研究課題について実際に取り組んでもらい、自身の研究課題と研究計画のアップデートを計画的に行っていく。その際、資料収集の方法等の指導も行う。 特に、年1報のペースで研究論文の作成、報告を院生に課し、計画的に研究を進捗させていくことを意識させる。 また、適宜最新判例や、学術論文、税制改正等について対話をしながら、租税法への関心や理解を深めていく。</p>
<p>演習Ⅰ (山下壽文)</p>	<p>博士論文作成に必要な会計理論に関する体系的知見の整理と深化を目的とする。そのため、「古典的アプローチ」と対比しながら、「意思決定有用性アプローチ」の特徴を整理し、「財務会計概念フレームワーク」の主要な論点、とりわけ「公正価値会計」に関する理論的研究を深める。</p>
<p>演習Ⅱ (麻生隆史)</p>	<p>高度なデジタル画像処理技術を詳細に解説する。特にニューラルネットワーク、ファジィ理論、カオス理論等のソフトコンピューティング技術を学び、それをデジタル画像処理へ応用しシミュレーションする。FPGA 等を用いたハードウェア技術もあわせて学ぶ。さらに論文作成に必要な様々なアイデアをさらに討論し、高度な研究の進め方を指導する。</p>

授業科目名	講義等の内容
<p>演習Ⅱ (荒平高章)</p>	<p>演習Ⅰを受け、自身の研究内容について国内外での位置づけを明確にした上で、引き続き研究を継続し、実験データを整理し、考察を進める。得られた結果をもとに国内外の学会での発表や論文投稿を積極的に行う。</p>
<p>演習Ⅱ (小川雄平)</p>	<p>演習Ⅰに引き続いて研究の進め方を指導し、研究成果を関係学会で報告させる。学会報告の内容を基にした学術論文をもう一編完成させることに目標を置いて指導する。</p>
<p>演習Ⅱ (春日克則)</p>	<p>演習Ⅱでは、演習Ⅰの考察を踏まえ、税務会計と財務会計との関係性が、各時代においてそれぞれどのように把握されていたかについて研究していく。</p>
<p>演習Ⅱ (片山准一)</p>	<p>演習Ⅰで構築した研究成果を発展させるべく、様々な文献収集を通してより高次の研究指導を行う。</p>
<p>演習Ⅱ (車炳圀)</p>	<p>演習Ⅰで習得した知識をベースに博士後期課程で行う研究のテーマを決め、その関連資料の収集及び輪読、追実験などを中心に研究を進めるとともにその研究成果を随時論文にまとめ、発表する。また、研究課程で出てきた諸問題点の検討および改良を行う。</p>
<p>演習Ⅱ (宮崎裕士)</p>	<p>演習Ⅱでは、引き続き博士論文の作成に取り組んでもらう。また、適宜最新判例や、学術論文、税制改正等について対話をすることで、博士論文作成に必要な租税制度に関する体系的知見を習得させる。さらに、年1報のペースで研究論文の作成、報告を院生に課し、計画的に研究を進捗させていく。</p>
<p>演習Ⅱ (山下壽文)</p>	<p>博士論文作成に必要な会計制度に関する体系的知見の整理と深化を目的とする。そのため、わが国とアングロ・アメリカン系主要諸国における会計規制、コーポレート・ガバナンスの相違と国際的な趨勢について整理し、会計のグローバル化に関する理論的研究を深める。</p>
<p>演習Ⅲ (麻生隆史)</p>	<p>デジタル画像処理に関する様々な研究をまとめ、演習・シミュレーションで得られた成果を基に、論文作成のための研究のまとめ方、研究の細部に関する検証、情報科学の分野での直近の研究成果の調査をする。さらに論文作成に必要な様々なアイデアを再検討し、より高度な研究の進め方・まとめ方を指導する。具体的には、研究の新規性・学術的なレベル・社会への貢献等を検証する。</p>
<p>演習Ⅲ (荒平高章)</p>	<p>演習Ⅱを受け、博士論文執筆のために自身の研究内容について国内外での位置づけを明確にした上で、必要な実験データを取得・整理し、考察を進める。得られた結果をもとに国内外の学会での発表や論文投稿を積極的に行う。</p>

授 業 科 目 名	講 義 等 の 内 容
演習Ⅲ (小川雄平)	演習Ⅰ及びⅡで作成した2編の学術論文を核に学位論文のスケルトンを検討・確立し、関係学会での報告を経て、学位論文にまとめ上げるように指導する。
演習Ⅲ (春日克則)	演習Ⅲでは、課税所得計算原理を追求する税務会計と、意思決定有用性を指向する財務会計とを統合することの可能性について探ることとしたい。
演習Ⅲ (片山准一)	演習Ⅰ・Ⅱで培った研究成果を学位論文として纏め上げられるよう、論文指導を行う。
演習Ⅲ (車炳玓)	演習Ⅱで進めてきた研究をまとめ、研究成果を学会発表及びジャーナル論文として投稿する。また、研究課程で出てきた諸問題の改良を進めるとともに知的メディア情報処理に関する知見をまとめ、より高度な知的処理手法の開発を目指す。
演習Ⅲ (宮崎裕士)	演習Ⅲでは、引き続き博士論文の作成に取り組んでもらう。また、適宜最新判例や、学術論文、税制改正等について対話をし、自身の研究と結びつけて考えさせることで、博士論文完成に必要な集合知からの知見を現出させる。さらに、1報以上の研究論文の作成、報告を院生に課し、演習Ⅱまでに作成した論文と組み合わせて、最終的な博士学位論文の骨格とする。
演習Ⅲ (山下壽文)	演習Ⅰおよび演習Ⅱにおける「意思決定有用性アプローチ」、わが国の会計制度および会計のグローバル化の研究を土台に据えながら、博士論文のテーマをもとに論文作成指導を行う。その際、博士論文作成者の研究テーマに関する研究報告とそれに対するディスカッションを中心にして進める。